

2015年4月12日主日礼拝

説教「世の終わりまで」  
マタイの福音書 28章 16-20節

【疑う弟子】

今日の箇所には、聞き捨てならない一文があります。「そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った」(17)です。弟子たちの中には疑う者がいました。主イエスが復活なさったということが信じられない者がいたのです。このことは、不思議に感じられます。弟子たちといえば、使徒たちです。教会を築いた使徒たちの中に、主イエスの復活を疑う人がいたというのですから。

そのとき、主イエスはどうなさったのでしょうか。主は、疑った弟子を叱りませんでした。がんばって信じなさいとも、おっしゃいませんでした。「イエスは近づいて来て」(18) くださいました。なんとという恵みだらうかと思えます。

主イエスの復活というのは、ほんとうに不思議なこと。頭ではよくわからないこと。だから、こうして礼拝に集った私たちの中にも、ひょっとしたら、疑ってしまう人がいるかもしれせん。いや、疑う人と疑わない人がいるというのでもないでしょう。むしろ私たちはみな、ふと主イエスの復活を疑う、復活がぼんやりとする、という時があるだろうと思えます。でも、そのとき、主イエスは、私たちに近づいてくださる。ご自分の方から近づいてくださるのです。

【バプテスマを授け】

近づいてきた主は、「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」(19)とおっしゃいました。バプテスマとは、主イエスのみうでの中に抱かれること。それがバプテスマの本質です。

バプテスマには幼児洗礼というものがあります。私たちの教会ではいたしませんから、ちょっと不思議な気がします。けれども、幼児洗礼にも学ぶべきところがあります。それは、その赤ちゃんを丸ごと主イエスにゆだねること。なにもわからない赤ちゃんを、主イエスの手に抱きかかえていただき、やがて自分の口から信仰の告白ができるように育ててくださると信じるのです。

思えば成人洗礼を受けた私たちも、振り返ってみれば、すべてがわかっていただけではありません。それでも、わからないなりに、自分を主イエスのみ手に委ねました。主イエスに抱かれてしまったのです。そうしておいて、ほんとうによかったと思えます。私たちの弱さも、疑いも、ひっくるめて、丸ごと抱きかかえてくださった主イエス。その愛を、すべての人に知ってもらいたいと思えます。だから、教会は、主イエスを宣べ伝え、バプテスマを授けます。主のみうでに抱かれることの幸いを世界に伝え続けるのです。

【インマヌエル】

「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(20)で終わるマタイの福音書の始まりは、「その名はインマヌエル(神は私たちとともにおられる)と呼ばれる」(1:23)でした。ここに福音書を貫いて、私たちとともにいてくださることを、主はご自分の最大の願いとしてくださっているのです。

そんな主イエスとともに生きる生き方はどのようなものでしょうか。「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい」(28:20)とあります。イエスはそのご生涯によって、ほんとうの生き方を教えてくださいました。主イエスは神。人間と共に歩む神がどういうものかを示されました。それは、自分を与える神。仕える神であった。そして、主イエスはほんとうの人。神と共に歩む人間がどういうものかも見せてくださった。それは、神を信頼し、神の力によって、自分を与える人、仕える人でした。

私たちはすでにもう、神の子とされています。だから、私たちに命じられているのは、神の子にとって、もっとも自然な生き方なのです。愛し、与え、覆い合う生き方。赦し合い、補い合う生き方。もし私たちのうちにその生き方を妨げるかたくなさがあるなら、主イエスがご自分の権威をもってそのかたくなさをくだいてくださいます。